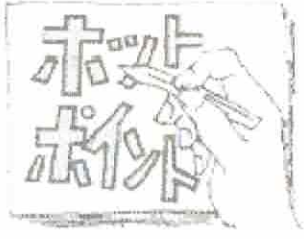

武蔵野の歌が聞こえる

武蔵野といわれる東京都中西部から埼玉県にかけて不毛であった大地を新田として開発したのは、八代将軍徳川吉宗である。今から三〇〇年前の宝永四年、日本最大級とされる宝永大地震と富士山の大噴火が発生。地震の復興対策にともなう財政の逼迫と天候異変によって続発する飢饉対策として、新田開発は行われた。当時すでに百万都市となっていた江戸の食料確保と財政再建の切り札となった▼吉宗から新田開発を命じられたのが大岡越前守忠相である。新田開発は遅々としてすすまず困難をきわめたが、この危機を乗り越えるために忠相が抜擢したのが府中出身の農民・川崎平右衛門であった。平右衛門は食料の備蓄、荒地でも育つ換金作物の普及等を協同の力を引き出しながら展開した。基本を「自分たちの村は自分たちでつくる」に置き、村中の老若男女皆が参画できるよう現在の協同組合のような仕組みをつくって、開発を成功に導いた▼この「武蔵野を協同の大地に変えた川崎平右衛門」の物語が合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』となり、九月一一日から一五日まで、東京都小金井市にある現代座会館で公演される。三・一一の復興が停滞する中、真の復興を果たしていくためには協同の力の発揮が欠かせないとして、劇作家・木村快氏が地域起こしの有志といっしょに勉強会を重ねて脚本を完成させた。出演者も事務局もすべてボランティア。協同を実践しながら、今、協同の必要性を訴えかける。観劇希望の向きは現代座事務所℡〇四二―三八一―五一六五まで申し込まれたい。

（土着菌）